

ハイデルベルク信仰問答講解説教8「三位一体」(2011年9月25日 礼拝説教)

【聖書箇所】

聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。(申命記6：4-5)

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタイ28：16-20)

【説教】

今日は、第八主日、問24-25を読みますが、ここをお読みになられて、すぐにここは三位一体の教理が言われていると気付かれた方も多いと思います。「三位一体」というのは、キリスト教の教理の言葉ですが、普段の礼拝説教で聞くことはあまりないと思います。そういえば求道者会、あるいは受洗準備会などで聞いたことはあったと思い出している人もいらっしゃるかもしれません。確かにそういう学びで触れることはあるでしょう。ちなみに「三位一体」という言葉は、世間一般でも言われますし、定着している言葉ですが、元々教会の教理の言葉です。また「さんみいったい」と言いますが、教会によっては「さんいいったい」と読むところもあります。この説教では慣れ親しんでいる読み方「さんみいったい」と読みたいと思います。

礼拝の中で触れることはあまりないと申しましたが、しかし教会で「神さま」と言う場合、それはこの三位一体の神さまを意味していると言っても間違いではありません。父なる神さま、子なるイエス・キリスト、聖霊なる神さまとそれぞれ別々に言うことはあっても、基本的にそれらが一つの神さまであることは既に大前提になっています。今日は説教において、改めて三位一体の教理に触れますが、しかし神学的な説明をするつもりはありません。また三位一体の教理について歴史的にどんな議論がなされてきたかご紹介することも説教においてはあまり意味のないことだと思います。ただこの教理がキリスト教の歴史の中で絶えず議論され、その中で持ち堪え、今日もなお存在し、わたしたちの信仰を支えていること。それだけの経験を踏んでいるものであることは認めなくてはなりません。

よく「三位一体」という言葉は聖書にないが、聖書にないものを信じることはできないという人々もおります。確かに聖書にはどこを探しても「三位一体」という言葉は出てきません。これは後の教会が生み出した教えです。どうして生み出したのか。それは必要があったからです。この教理がなければ聖書を正しく読むことができなくなるからです。先ほども申しましたように、この三位一体の教理は、キリスト教の最初期の頃から絶えず議論され、その中で確立されてきました。それは今もなおお支持されているのです。この2000年の歴史を通してきた教理を、たかが数十年しか生きていないわたしたちが簡単に無視し否定することができのでしょうか。

今日、平気で三位一体を否定したり、イエス・キリストの神性を否定したりする人たちがいます。それが現代的な聖書解釈だと公然と言って退ける人々が教会にもいるのです。現代的とは何でしょうか。教理は古いのでしょうか。今の時代に合わないのでしょうか。よく現代の感覚で聖書を読み直すと言います。そういう人たちは歴史を見ていません。聖書と即現代、今の自分。それは非常に早計で危険です。主観的であり、思いつきです。趣味として一人で楽しむならいいでしょう。でも教会で、公の礼拝でそういう個人的な聖書解釈を語るのはいかがなもの

でしょうか。しかもそれがキリスト教の教理から逸脱しているとなればそれはもはや論外ということになります。教会で語る言葉は、絶えず歴史に裏打ちされたものでなければなりません。歴史を通してきたものであるからこそ信頼できるのです。そしてこの歴史の中で持ち堪え、今に伝えられている教理だからこそ、現代に向かって確かな真理を発信することができるのではないのでしょうか。

しかし、それだけではいけません。いくら歴史の中で持ち堪えたと言っても、それが聖書に基づくものでなければ意味がありません。先ほど、三位一体という言葉は、聖書に出てこないと申しました。けれども、この三位一体の教理を生み出していくのは、実は聖書そのものでもあります。それについて信仰問答は問25で次のように述べています。「御言葉において啓示なさった」と言います。聖書がそのことを明らかにしている。信仰問答はその根拠となる御言葉を幾つかあげています。その中の一つ、今日はマタイによる福音書第28章のところを読みました。「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」とあります。そこには神さまの名として「父と子と聖霊」が並記されています。他にもⅡコリント13：13は祝福の言葉ですが、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」とあります。聖書がそのように神さまを言い表しているのです。それは人間が勝手に考えだした知恵ではありません。神さまが御言葉において啓示されていることです。

そしてその聖書の要約である使徒信条もまた、この御言葉において啓示されていることをそのまま表しました。それが使徒信条の構造を作ったのです。つまりそれは三つの部分で構成されており、父、子、聖霊についての告白となります。問24を読みます。

ここにわたしたちの理性を越えた信仰の秘義があります。つまりただ一人の神さまが同時に三つの異なる仕方で生きて働いておられるということです。これは三人の神さまがいるということではありません。あくまで唯一の神さまであります。申命記6：4「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」とあるとおりです。しかしこの唯一の神さまが、御自身の中に等しい三つの有り様をもっておられる。昔から教会では神さまが御自身の中に交わりを持っておられるということを言います。神さまはただお一人だけれども、孤独ではない。交わりをお持ちだ。これはわたしたちの理屈で分かるということではありません。先ほど、「秘義」と申しましたが、これこそ信仰をもって受け止めなくてはならないことです。でもこのことを信じるのが、わたしたちの信仰を多に助けるのです。

ここで信仰問答が、父としての創造、子としてのあがない、聖霊としての聖化と三つの働きを告白していることに注目しましょう。神さまはただお一人だけに「創造」「贖い」「聖化」と三つの御業をもってわたしたちにお働きになられる。「聖化」というのは、キリストによって、あがなわれ、罪赦された者としてそれ

に相応しく整えられていくということです。パウロがよく言うところの「御子に似たものに変えられていく」というのはこの聖化のことです。そのように終末に備えるのです。

ただ気をつけなければならぬのは、よくこれは時系列で、旧約聖書の時代は創造、新約聖書の福音書では御子によるあがない、そして教会の時代では聖化となっている。だから今は聖霊による聖化の時代だと考えることがありますが、それは間違いです。そのように考えると、例えば旧約聖書の神さまは裁きの神さまで、新約聖書は愛の神さまだから、わたしは新約聖書の神さまが好きだというような意見が出てくる。

三位一体の信仰において、それぞれの時代に別々の仕方です神さまは関わられたのではなく、常に三位一体の神さまとして「創造」「あがない」「聖化」の御業をもって、わたしたちに関わられていると理解する必要があります。創造や贖いは過去の出来事ではなく、今もなお起こり続けているのです。また旧約聖書に顕著な厳しい裁きの神さまは同時に御子をお遣わしになられる愛の神さまでもあるのです。その厳しさは御子の十字架に表されました。そのように神さまの救いは、創造、あがない、聖化という御業をもって絶えず具体的に立体的にわたしたちに臨むのです。

ここに一つの方向性が示されていることにお気づきになるでしょう。創造、贖い、聖化。これは一人の人間が救われる道筋そのものです。その道程に神さまが絶えず同伴される。一人の神さまがです。別々の神さまがそれでは後をよろしくと頼んで次に任せられるのではない。一人の神さまが創造から、あがない、聖化とわたしたちを導かれるのです。それは神さまがわたしたち一人一人の人生に責任をもって関わってくださるということではないでしょうか。

先日、高齢者祝福の時に一つの御言葉を読みました。イザヤ46：4「わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」この御言葉を繰り返し訪問した先でもわたしは読みました。神さまがわたしたちを造られた。それ故に、わたしたちに対して責任がある。最後まで担ってくださるのです。例えば商品に関してそれを製造し販売したところには責任があります。だからアフターケアをします。わたしたちの人生がもし間違った方向に向かってしまうなら、それを直し、正しい方向に向けてください。それもまた神さまの御業なのです。造った後は知らないというのではない。アフターケアがあるので。

聖書が示す人間の罪は、明らかにその人間を本来の創造の目的から外すものであります。それを神さまは見ても振りを見るのではない。きちんと神さまが責任をもってこれを直す。そのために御子をお遣わしになられ、聖霊を与えて、わたしたちをケアされるのです。それは本来の祝福された人間へと回復されることに他なりません。そのようにわたしたちの人生に責任をもってくださる。自分で責任を持つということではない。神さまが責任を持たれるのです。それだけわたしたちの人生は重いのです。神さまがそういう仕方です責任を持たれるほどに。

先日、ある映画を借りてきて見ました。NHKの番組でその映画に触れていたので見ようと思ったのです。「素晴らしき哉、人生」という古いアメリカの白黒の映画です。ある主人公の男が、自分の夢をあきらめ、家業を継ぐ。でもその事業も失敗する。男は自暴自棄になりクリスマスイヴの晩に川に飛び込むとします。でもそのことを神さまはご存知で、天使を遣わして、主人公の男に自分の存在のいかに重く大切なことを伝える。それはその主人公の男がこの世に存在しなかったらどういう世界になっているかを見せるという仕方です。その仮の世界へ男は天使と行きます。するとすっかり町は変わり、愛する家族も友だちもいない。そのことに愕然とする。そこで気付くのです。自分の人生が如何に素晴らしいものであるかを。その男のために家族は祈り、友だちや世話になった者たちが寄付を集めます。もちろん最後はハッピーエンドとなります。

わたしたちの人生は、一人で成り立っているのではなく、多くの人と関わって成り立っています。そして何より忘れてはならないのは、その人生のために神さまが独り子をお与えになりました。そして聖霊によって、最後、天国に行くまでその人生を救いに相応しく導いてくださるのです。わたしたちの人生はそういう神さまの導きのもとに置かれているのです。三位一体の信仰は、そのようにわたしたちの人生が神さまによって創造、あがない、聖化と祝福されたものへ導かれていることをわたしたちに約束しています。

そして、その祝福された人生は、一人の神さまが御子を通して、聖霊を通して、徹底的に関わってくださることによって、その道がつけられました。先ほど、神さまは御自身の中に交わりを持っておられるということを申しました。アウグスティヌスはそれを「愛」と呼びました。父なる神を「愛する者」、子なるキリストを「愛される者」、聖霊を「愛そのもの」と表現します。御自身の中に完全な愛がある。この人生を救うために、神さまはその愛を惜しみなくわたしたちに与えられました。真の人間となられ、この罪の悲しみに寄り添われました。それが子なるイエス・キリストであります。聖霊はまた「共にうめき、とりなす」存在としてわたしたちに与えられます。弁護者、助け主です。

三位一体の教理は、何よりその神さまの共感性、それは愛に基づくものであります。それをわたしたちに示しているのです。この神さまの御業に生かされた者は、同じように愛に生きることができる。神さまを愛し、人を愛する。もつと他者に寄り添い、共感することができる。そういう人間として神さまはわたしたちを新しく創造されるのです。三位一体の神さまがそのように今日もわたしたちに臨んでおられることを覚えましょう。祈りをささげます。

天の父よ。あなたはこの世界を創造され、わたしたちを造られました。そのわたしたちがあなたの創造の目的に適うように、あなたは御子を世に送ってください、更には聖霊をこの御子へ導く助け主として与えられました。そのようにしてあなた御自身が、すべてを用いてわたしたちに寄り添い、助けて、その祝福された人生を取り戻してくださることを感謝いたします。どうかその神さまの愛に生かされて、わたしたちも神さまを愛し、人を愛する人生へと導かれますように。主の御名によって祈ります。アーメン。